

# ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2023

こんにちは。今年最後の「ほんばこ」になりました。今回は全集を読もう、という内容で先生に書いていただきました。

3月 (弥生・花見月・桜月)

\*二十四節気\*

啓蟄 6日

大地が暖まり土中で冬眠していた虫たちが、春の訪れを感じ、穴から出てくる頃です。

春分 21日

太陽が真東から昇って真西に沈み、昼と夜の長さがほぼ同じになる頃です。この日から夏至まで、昼がだんだん長くなり、夜が短くなります。

## 図書委員会の係からお薦めの本

『夏目漱石全集』（岩波書店）全集を読み、と十代のころ言われた。小説だけでなく、評論、随筆、日記、書簡の類まで載っている全集であれば、その作家の全体像がつかめる。偉大な作家（思想家）は、その時代・社会と格闘し、すぐれた著作を残している。その作家の全著作をカバーすることで、読者は、その著者の苦闘のあとを追いかけて、その著者の到達したレベルまで連れて行ってもらえる。当然読者なりの現代社会との格闘が同時に行われるべきだ。とは言え、誰の全集を読むべきか？ の選択が大変だ。ここでは漱石全集を推す。『こころ』は『私の個人主義』と、『虞美人草』は『文芸の哲学的基礎』と併読すると理解が深まる。高校でとは言わないが二十代前半までに漱石全集を読んでみよう。なお、透谷全集（岩波）は短くてすぐ読める。内村鑑三全集（岩波）は年代順で便利。大江健三郎全小説（講談社）も魅力だ。宮沢賢治全集（ちくま）は文庫で買える。昔の全集は古書で安く買えることも多い。（図書研修課 Y）

## 春季休業中の図書館利用について

・課外中の午後(3月23日)は開館しています。

\*希望する本が重複する場合があります。読み終えたら、早めに返却をしてください。

## ○ 1月新着図書紹介

著者	書名	出版社	出版年	NDC
最相 葉月	理系という生き方: 東工大講義 生涯を賭けるテーマをいかに選ぶか	ポプラ社	2018.2	402.8
今井 邦彦	あいまいなのは日本語か、英語か?	ひつじ書房	2011.2	830
古田 直肇	英文法は役に立つ!: 英語をもっと深く知りたい人のために	春風社	2015.4	835
王城 夕紀	青の数学	新潮社	2016.7	913.6
知念 実希人	十字架のカルテ	文藝春秋	2022.11	913.6
ディーリア・オーエンズ	ザリガニの鳴くところ	早川書房	2020.3	933.7
ミヒャエル・エンデ	モモ	岩波書店	2005.6	943

薦めてみる本 川越宗一『熱源』文春文庫

1 川越宗一 1978年鹿児島県生まれ。大阪府出身。龍谷大学文学部史学科中退。『天地に燦たり』『熱源』『海神の子』など。『熱源』で2019年、162回直木賞。

## 2 『熱源』

かなり面白い。さすが直木賞だ。個々の人物については、部分的に、もう少し語って欲しい、と思うところはあるが、全体としては面白い。巻末の解説(中島京子)に「群像劇」だとあるが、そう読むべきかも知れない。舞台は樺太(サハリン)が中心。明治から第2次大戦の約70年間に生きた人々を描く。彼らは、帝政ロシアと大日本帝国に翻弄される、あるいはアイヌ、あるいはギリヤーク(ギリヤークは他称で、自称はニクブン、あるいはニヴフ)、あるいはオロッコ(ウィルタ)、あるいはポーランド人たちだ。彼らの故郷はどこにあるのか、大国の文明に飲み込まれる他はないのか、そもそも文明とは何か、生き延びるためにはどうすればいいのか、人種・民族の優劣劣敗の思想は打破できるのか、などが問われており、すぐれた問題提起の書になっている。その答えは明確ではないが、誰もが同じ人間だ、何者かである前にただの人間だ、生きよ、ともかくも生きてなすことがある、という強いメッセージがある。ニクブン(ニヴフ)とは、ただ単に「人間」という意味である。

重要人物の一人、ヤヨマネクフ(山辺安之助)(1867~1923)は実在のアイヌ。樺太に学校を作り、また白瀬中尉の南極探検に犬ぞりを率いて参加した。彼の口述を金田一京助が筆記したりもしている。別の重要人物の一人、ブロニスワフ・ピウスツキ(1866~1918)も実在。ポーランド(厳密にはリトアニア)生まれで、皇帝暗殺に連座して樺太(サハリン)に流刑となるが、現地のアイヌやウィルタと交流、その文化を記述した。ポーランドに帰り独立運動に関わる。これらの史実に虚構を織り交ぜながら、物語は進展する。どこまでが史実でどこからが虚構かは知らない。「もしあなたと私たちの子孫が出会うことがあれば、それがこの場にいる私たちの出会いのような幸せなものでありますように。」繰り返されるこの願いが心を打つ。大国同士の戦争に巻き込まれ人間同士が引き裂かれる現実もある中で、それでもなおただの人間同士として生きて出会い、友だちになろう。そう聞こえる。

以下は虚構も含めた、作中での人物像。

ヤヨマネクフ：樺太生まれのアイヌ。幼少期に北海道に移住。日本名山辺安之助。/シシトラカ：樺太出身のアイヌ。ヤヨマネクフの友人。/千徳太郎治：父は和人の武士、母はアイヌ。学校の先生を目指す。/キサラスイ：美しいアイヌ女性。琴の名手。/バフンケ：樺太のアイヌの棟梁。多くのアイヌを養う。/イペカラ：バフンケの養女。/チュフサンマ：バフンケの姪。のちブロニスワフの妻になる。/ブロニスワフ・ピウスツキ：ポーランド出身。ロシア帝政により樺太(サハリン)に流刑となるが、ギリヤーク(ニクブン)やアイヌと出会い生きる熱源を与えられる。アイヌなどの文化の研究者となる。のちヨーロッパに戻りポーランド独立運動に関わるが…/アレクサンドル・ウリヤノフ：ロシアの革命家。レーニンの兄。刑死。/シュテルンベルグ：民俗学者。ユダヤ人。実は革命家で「人民の意志」の残党。/コヴァルスキ：ロシア地理学協会の一員。実はポーランド人で革命家。/ユゼフ・ピウスツキ：ブロニスワフの弟。革命家。/長谷川二葉亭：二葉亭四迷。ロシア語に詳しい作家。/白瀬轟(のぶ)：軍人。南極探検をする。/大隈重信：大物政治家。/金田一京助：アイヌ語研究者。/クルニコワ伍長：ソ連兵士(女)。昭和20年8月15日過ぎの樺太(サハリン)で戦闘する。/源田一等兵：日本軍兵士。ウィルタ(オロッコ)出身だが日本軍兵士となり特務機関にいた。昭和20年8月15日過ぎの樺太でソ連兵と戦闘する。